三領石全景

三角柱の碑の各面には、

此三領境東西北峯尾續雨水分佐嘉領　松浦郡有田郷

此三領境西北峯尾續雨水分平戸領　彼杵郡早岐郷

此三領境東西峯尾續雨水分南大村領　彼杵郡波佐見郷

の文字が刻まれている。

さんりょうせき
三領石

上南山から長崎県境に向かって、なだらかな峠を登り県境を越えて行くと、かつて佐賀・平戸・大村の三藩が境を接していた場所があります（現・波佐見町村木峠）。そして、そこに建てられている標柱が三領石です。

この三領石は、江戸時代に三藩が境をめぐり争った結果、寛保２年（1742）に協定を結び、境の目印として建立したものです。しかし、建立後も三領石の位置をめぐって、いさかいがあったようです。なかには、こっそり場所をずらして問題になったこともあったそうです。

また、ここから三方面に下ると、それぞれの藩の焼物の里（有田、三川内、波佐見）に辿り着きます。藩境であるこの地域に焼物の里が集まっているのは、陶石の分布状況に関わりがあるとも言われています。いずれにしても、三藩の境界の地に建つ三領石は、藩を越えて焼物の歴史を見つめてきたことでしょう。

皿山びとの歌

有田町歴史民俗資料館報　No.25

皿山の人物

谷口藍田

谷口藍田肖像

谷口藍田という人物をご存じでしょうか。彼は文政5年（1822）生まれ、有田出身の儒学者で、明治35年（1902）に80歳で亡くなるまで、生涯を教育と人材育成に捧げた人でした。

今回はこの藍田の生涯を振り返り、彼の生きた時代について考えてみたいと思います。

● 幕藩体制と儒学 ●

藍田が活躍した幕末から明治は、日本が鎖国という長い眠りから覚めて、近代国家へと歩み始めた時代でした。この大転換は、いわゆる「内憂外患」と表される、徳川長期政権による幕藩体制の構造的矛盾の深まりと、西洋近代国家の軍事的圧力などによって引き起こされました。しかしその根底には、藩や民間によって設立された学問や教育機関の増加と、それらにより身分を問わず普及した教育がありました。

当時の学問や教育の主流は儒学でした。ご存じのように儒学は、中国春秋時代末頃の思想家孔子(紀元前551年頃～479年)の思想をもとにした儒教を研究する学問であり、たとえば、その聖典の一つ『論語』によく登場する書き出し「子曰く…」という言葉はだれでも一度は耳にしたことがあるだろうと思います。

もともとこの儒学を最も必要としたのは幕府でした。それは儒教思想そのものが「自己の修養につとめ、これをおし広めて、家を国をはては天下を理想的に治める」ことを目標としており、忠・孝を重んじる姿勢が、強固な身分制度の維持に好都合であったためです。そのため、武士などをはじめとした支配者階級にこの思想を学ばせ、それを一般の民衆には道徳思想として定着させようとしました。したがって各種の教育機関の増加も手伝い、時代がすすむほど、儒学的教養が身分を問わず普及していきました。

ところが、よく考えれば分かることですが、儒学的な教養を身に付ければ付けるほど、その学問の性格上、現実の世の中との相違がはっきりと分かるようになってきます。しかもこれが様々な階層で普及するともうそのエネルギーを抑制することはできません。つまりある意味では、幕藩体制を維持したのも儒学でしたが、それを突き崩したのも儒学でした。

● 藍田の生涯 ●

谷口藍田は、そろそろ幕藩体制にもほころびのみえはじめた文政5年、有田の白川で生まれました。父は有田皿山代官所の役人、母は武雄の儒医清水龍門の姉にあたる人で、まさに儒学を志すには恵まれた環境でした。幼時は父母に教育され、すでに10歳で儒教の経典である四書・五経が読めたといいます。

当時の儒学者たちは、よく旅をしました。現代のように居ながら情報収集やコミュニケーションの可能な時代とはちがい、より見識を高め自己を磨くためには、直接自分で足を運ばなければならなかったからです。それは裏を返せば、日本の各地に著名な知識人や文化人が分散していた証拠であり、もしかしたらこの点では、今よりももっと「地方の時代」であったといえるかもしれません。

藍田も様々な場所におもむき、多くの人々との親交を深めました。

12歳の時から伯父清水龍門のもとで学んでいた彼は、18歳で福岡と大分の境にある英彦山(ひこさん)に入山、玉蔵坊から易を学んでいます。そして、翌年下山すると大分の儒学者広瀬淡窓(ひろせたんそう)の咸宜園(かんぎえん)に入門し、塾頭も勤めました。21歳の時には江戸におもむき、儒学者羽倉簡堂(はくらかんどう)に学び、その他の様々な交流を通し、幅広い教養を身に付けました。

その後有田に帰って白川に家塾を開きましたが、学びにくる者が多かったため上幸平に移し、さらに現在の山内町宮野に移したといいます。塾生には武士もいましたが、町人や農民も多かったようです。

その他にも鹿島藩校弘文館の教授を勤めたり、鹿島義塾や藍田私塾を開設するなど、生涯を教育と人材育成に捧げました。

現在の有田には、藍田の業績や足跡を偲ばせるものは多くありません。唯一、中ノ原にある八坂神社の社額が彼の筆だといわれているだけです。しかし本当は彼の残した学問や教育の土壌こそが、有田にとっては最も重要な遺産であったのかもしれません。

八坂神社（中ノ原）の社額

研究ノート

有田皿山と飢饉

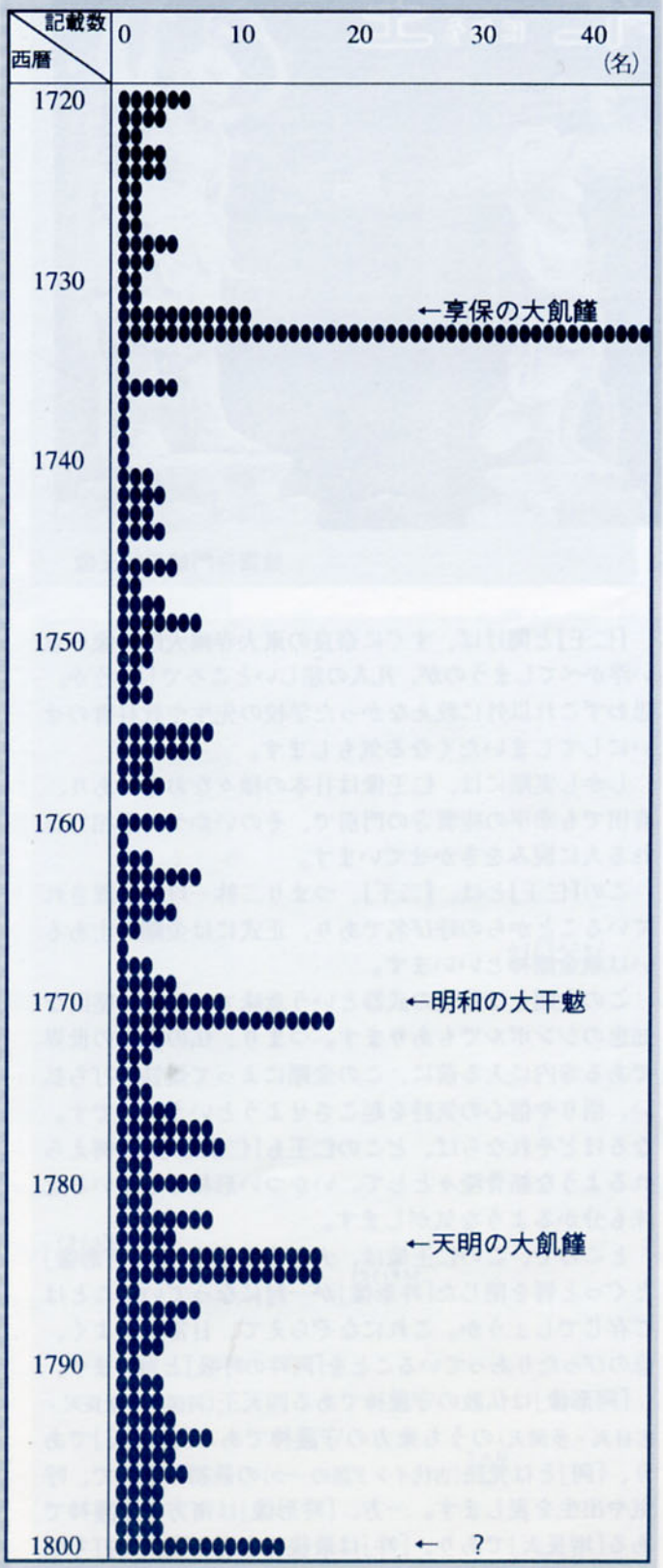
江戸時代において経済の基盤となる産業は農業（米）でした。大名などの経済力も石高によってはかられましたし、米相場は物価変動の基準となるものでした。よって、飢饉ともなれば食料不足はもちろんのこと経済全体の混乱を引き起こしたと思われます。

有田皿山は商品経済または貨幣経済が近隣の農村部に比べて浸透していたと思われますが、やはり飢饉の災害はまぬがれなかったようです。

右の表は西有田町にある竜泉寺過去帳に記載されている江戸中期の有田皿山に関するものを集計してみたものです。多い年を順に列記してみますと享保18年(1733)、明和８年(1771)、天明４・５年(1784・1785)となります。これらはいずれも大飢饉や大干魃(かんばつ)の当年ないし翌年にあたります。すなわち、享保の大飢饉(1732)、明和の大干魃(1770)、天明の大飢饉(1782～1787)です。

享保の大飢饉は西日本を中心に被害をもたらした災害で、その翌年有田皿山では過去帳記載分で40名以上の人が亡くなっています。そして、その後数年間の数値の低さをみると飢饉により人口が減少したことを推測させます。明和の大干魃は明和７年(1770)の夏から秋にかけて諸国で干魃が続いたもので、その翌年有田皿山では過去帳記載分で約20名の人が亡くなっています。そして、天明の大飢饉は天明２年(1782)に西日本の長雨による凶作によって米価が高騰し飢饉が始まり、さらに翌年の東日本の冷害によって未曾有の災害となったものです。有田皿山では1784～1785年の２年間に過去帳記載分で30名以上の人が亡くなっています。

平年の記載数は平均３～４名程度ですから有田皿山の人々の生活に対する飢饉の影響の大きさをうかがいしることができます。それでは窯業という産業に対する影響はどういったものだったのでしょう。有田皿山の製品にも影響を与えたのでしょうか。残念ながら現段階においては明確ではありません。今後はより詳細に製品の編年作業を進めて、文献資料等に現われる情報と照らし合せていかなければなりません。そして、飢饉の影響の実態とその対応策と効果を明らかにし、時代性を考慮しながら現在の有田と重ね合わせる作業が残されています。



竜泉寺過去帳記載数一覧表

（1720～1800年の皿山関係に限る）

（注）上記の表の数値は竜泉寺過去帳記載分に限られ、有田皿山全体の数値ではありません。また、筆者の不勉強により解読できなかったものもありました。

（野上　建紀）

桂雲寺門前の仁王像

『仁王』と聞けば、すぐに奈良の東大寺南大門の像を思い浮かべてしまうのが、凡人の悲しいところでしょうか。思わずこれ以外に教えなかった学校の先生や教科書のせいにしてしまいたくなる気もします。

しかし実際には、仁王像は日本の様々なお寺にあり、有田でも幸平の桂雲寺の門前で、そのいかつい形相で訪れる人に睨みをきかせています。

この『仁王』とは、『二王』、つまり二躰一対で配置されていることからの呼び名であり、正式には金剛力士あるいは執金剛神といいます。

この金剛とは最強の武器という意味で、如来の堅固な知恵のシンボルでもあります。つまり、仏の悟りの世界である寺内に入る前に、この金剛によって煩悩を打ち払い、悟りや信心の気持を起こさせようというわけです。なるほどそれならば、どこの仁王も「仁王立ち」と例えられるような筋骨隆々として、いかつい形相をしている意味も分かるような気がします。

ところで、この仁王像は、大きく口を開けた「阿形像」とぐっと唇を閉じた「吽形像」が一対になっていることはご存じでしょうか。これになぞらえて、日常でもよく、息のぴったりあっていることを「阿吽の呼吸」と言います。

「阿形像」は仏教の守護神である四天王(持国天・増長天・広目天・多聞天)のうち東方の守護神である「持国天」であり、「阿」とは梵語(古代インド語の一つ)の最初の字音で、呼気や出生を表します。一方、「吽形像」は南方の守護神である「増長天」であり、「吽」は最後の字音で吸気や打ち破ることを表します。つまり物事の始終、言い換えれば仏の教えの全てに精通していることを意味しています。

桂雲寺の『仁王』は、昭和11年に仏師・福崎日精によって制作されました。セメント製であるため傷みが速く、現在では樹脂コーティングで風化を防いでいるそうです。

この仁王はおそらくこれから先もずっと、その力強い睨みで、有田から災厄を振り払ってくれることでしょう。

寄贈・寄託資料紹介

寄贈資料　関　和男様より

◆染付梅花・牡丹唐草文皿(「宝永全家」銘) 1点

◆染付コンニャク印判草葉文皿(「元禄七年」箱書銘) 6点

寄託資料　谷口精一様より

◆谷口藍田関連資料　105点

有難うございました。

石場のこだま

NEW FACE

本　　名　松尾隆一
ペンネーム　石場のこだま
年　　齢　25歳
出 身 地　有田町戸矢
住　　所　有田町戸矢
担　　当　主に文献や民俗

3月末に、約4年間資料館で『白川の細流』を執筆されました杉浦（知北）万里学芸員が結婚して退職されました。

風薫る6月。

4月に勤め始めた私は、バタバタと東奔西走の毎日が続いています。

みなさんのところにも取材に伺うことがあるかもしれませんが、その時はよろしくお願い致します。

皿山びとの歌
有田町歴史民俗資料館報　No.25

発行年月日 ＊ 平成6年6月1日
編集・発行 ＊ 有田町歴史民俗資料館

〒844 佐賀県西松浦郡有田町391番地1
☎0955—43—2678

街角の歴史